

出会いの物語

マドリード、2006年2月

ケンイチロウ:



ケンイチロウ、トマス・サンチェスを訪問。 マドリード、2005年

君が訪れた時に、私たちの習慣や文化、スペイン人がどう合気道を解釈しているか、そしてとりわけ、私の道場での仕事に関心を示してくれたので、この作品を用意する気になった。君たちの文化のある特定の面に、どんな興味を感じるのか、自分でもよくわかっている。だけど、いつからこんな興味を持っているのだろうか？最初の接触はどんなものだったろう？

これは出会いの物語だ。まずはスペイン人と日本人の出会い。そしてペドロ・バウティスタの出会い。理想主義者であり夢想家でもあるペドロ・バウティスタは、国王フェリペ2世が任命した両国間の最初の使節で、サン・エステバン・デル・バジェの出身である。この町が、私たちが毎年合宿稽古を行い、私の祖先の出身地でもあるペドロ・ベルナルドのすぐ近く、同じ山脈に位置するのは、——恐らく——偶然ではないだろう。



ペドロ・ベルナルド（グレドス山脈（アビラ）の町）の風景。

スペインとポルトガル：航海の習性



Spain & Portugal today.

この冒険の始まりを位置づけするため、なんと 11 世紀にまで遡る。



イベリア半島内のかなりの部分を合わせた領土を有し、時がたつにつれて、今日のスペインの基盤を築いた、レオン・イ・カスティージャ王国の初期、『大王』フェルナンド1世は国王（1035－1065）であるとともに、アル・マンスールの攻撃を受けて以来イスラム教徒の手中にあった街、ラメゴ、ビセオ、コインブラの勝利の解放者でもあった。ポルトガルの合気道実践者が、毎年タムラ師範をお迎えするのが、そのラメゴという街であるのも、偶然ではないのかもしれない。



ラメゴ（ポルトガル）、1996年11月タムラ師範の講習会。スペイン人グループと一緒に道場へ向かうトマス、ロベルト、ダビ、サンチェス。

フェルナンド1世の後を継いだのが、息子であり——イスラム教徒追放を続行した後——イスパニアの皇帝となった、『勇猛王』アルフォンソ6世。エル・シッドの主君であり、トレドを征服したアルフォンソ6世は、5回結婚しているが、最初の妻を失い次の婚姻を取り決めている間に、ヒメナ・ムニョスという若い娘——ビエルソ出身——と親しくなり、エルビラとテレサという2人の娘をもうけている。

スペイン人とポルトガル人が同じ血統でありながら、今日では別々の国で、スペイン人が初めて日本に到着した時、すでに分離していたのは、ある意味、このテレサと1人のフランス人のせいだと言える。

勇敢で忠実な戦士であり、アルフォンソ6世の味方だったブルゴーニュ人は、イスラム教徒との戦いに加勢した。皇帝はその報酬として、ブルゴーニュ家のエンリケにポルトガル伯爵領の管理権を与えると同時に、娘テレサと結婚させた。その行政範囲の広さゆえ、2人は伯爵夫妻というより副王夫妻であったが、それだけではなかった。息子のアルフォンソ1世（1139－1185）が独立を成し遂げ、自らポルトガル王となったのだ。反抗的で野心に燃える性格のため、イベリア半島統一を達成し維持するという、祖父の夢を妨げることとなった。

しかし、分離されても、血筋、文化、民族などのつながりが断ち切られることはなかった。現に、わずかな期間ではあったが、1581年にフェリペ2世が無理に両国を再び統一させている。

イベリア半島はほぼ全体が海に囲まれており、君たちの島々のように、住人は緊密に共存していくしかなかった。しかも、同じ理想のために戦ったということも、忘れてはならない。血管に同じ航海の習性が流れるのは、避けようがなかった。

大陸間の旅

その航海の習性から、大旅行に迫っていこうと思う。夢見る気違いじみた者たちの、大陸間の冒険だ。

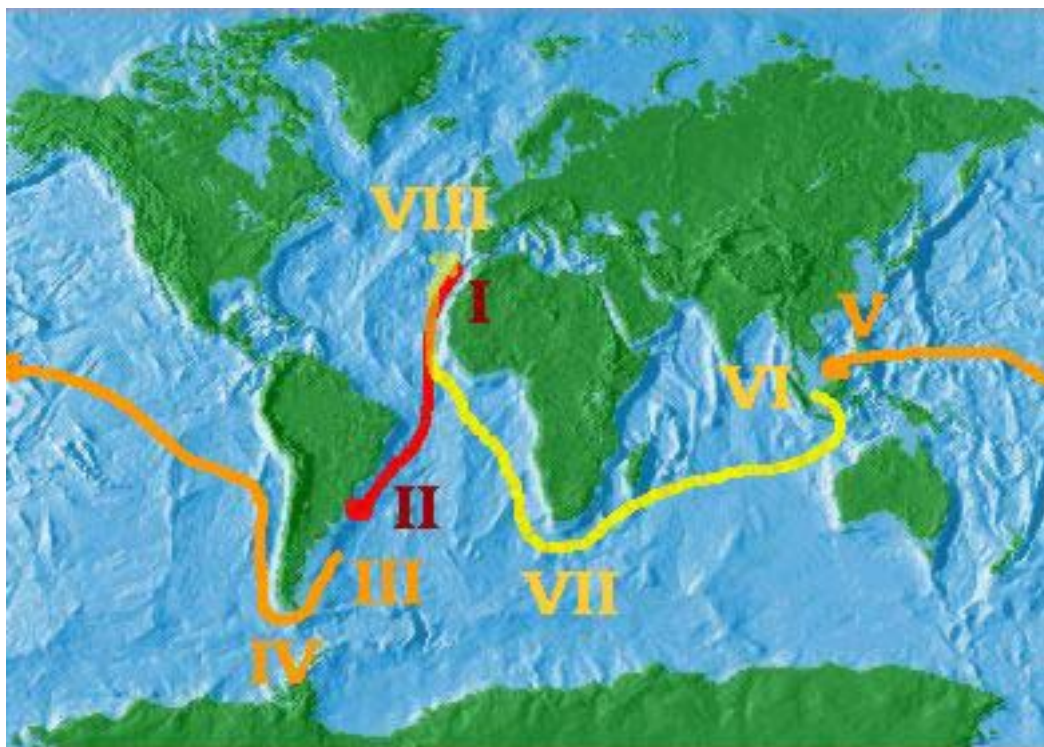
1493年、アレハンドロ6世はローマ法王であり、キリストの代理者という地位がもたらす権力のおかげで、世界全体を手中に収めていた。その権力により、当時植民地政策をとっていた強大国、スペインとポルトガルに、周知の世界を振り分けていた。公平かつ親切にも、それぞれの国に地球を180度ずつ分け与えていたのだ。境界線がはっきりせず、長さが曖昧であったため、——想像がつくように——両国間に大紛争が起こった。

スペインはブラジルを除く新大陸征服を続行し、ポルトガルはインド沿岸（ゴア、コーチン）を支配下に置き、マラッカ半島にまで達した。

さて、思い出すべき年がある。1544年だ。この年にポルトガル最初の派遣隊が日本に到着した。一方、スペインはその数年前から、フィリピンとマラッカへのルートを押さえていた。

少し時代をさかのぼろう。

スペインに仕えていたポルトガル人航海者マゼランは、西回りでアジアに達するために計画された艦隊の隊長に、フォンセカ司教から任命された。艦隊は5隻の船で構成され、1519年にセビージャを出発。サン・フリアン湾（パタゴニア）で、マゼランはスペイン人航海士による反乱を制圧しなければならなかった。サン・フリアンでの5ヶ月間の越冬と2ヶ月間の強制的な滞在の後、航海を再開し、自分の名前がつくことになる海峡を発見して、太平洋に入っていくが、4ヶ月に渡って食糧なしで航行することになる。多くの出来事の後、最終的にフィリピン諸島に到着したのは、わずか2隻だった。キリスト教に改宗し、我らがカトリック王の臣下となったセブ王が、他の原住民指導者と戦った際に援護に加わり、マゼランは——到着後それほど経たぬうちに——命を落とした。1521年のことだ。スペインに向かって——今度は帰途——わずか18人の乗組員が出発し、喜望峰を回って世界一周を成し遂げた。



- I.** マゼランとエルカーノ、セビージャから出航。
- II.** 嵐のために、10日間停留。
- III.** 南の航路を求めて再び出帆。
- IV.** 現在マゼラン海峡と呼ばれる海峡を通過。
- V.** マゼラン死去（フィリピン）。エルカーノが指揮を執る。
- VI.** 香辛料を積載して、エルカーノ帰途につく。
- VII.** エルカーノ喜望峰を回る。
- VIII.** セビージャに到着。

スペインに仕えるポルトガル人がフィリピン諸島に上陸したのなら、バスコ・ダ・ガマに同行して日本への航路を発見したのは、他ならぬスペイン人だった。フランシスコ・ザビエル。創立されたばかりのイエズス会の会員で、他の多くの修道士たちとともに、日本とスペインの間の社会政治、文化的な真の出会いを促した人物だ。なぜなら、ただちに交易は開始されたものの、関係を強固にしたのは、精神的なものを通じてだったからだ。もしかすると、そのために、今日でも私たちは互いに関心を持ち続けているのかもしれない。

フランシスコ・ザビエルはフランスに留学し、パリのソルボンヌ大学で、イエズス会創設者イグナチオ・デ・ロヨラと知り合う。二人は固い友情で結ばれ、一緒にキリスト教布教の偉業を成し遂げた。インドへ向けての派遣隊に同行するという、ポルトガル大使からの提案を、フランシスコ・ザビエルが受け入れたのも、この使命感によるものだった。

1549年8月15日、ザビエルを乗せたジャンク船が広く深い湾に入った。日本の南部、九州の南にある鹿児島港だった。

そして、鹿児島、本州の山口、都——現在の京都——を訪れた。

フランシスコと接触した日本人たちは、答えを出すのが難しい質問を投げかけてきた。君たちの宗教が最良のものなら、最も賢明な中国人がその宗教を知らないのはなぜだ？

まさにこの、最も賢明な人々を説得するという目的のため、フランシスコ・ザビエルは日本を後にして、中国に向かうのだった。

新しいキリスト教徒たちには、精神的指導者がいなくなってしまうのだろうか？

ペドロ・バウティスタ

私が特別な思いで尊敬してやまない、ペドロ・バウティスタの人物像に迫る前に、フランシスコ・ザビエルや信仰を共にする他の同志たちと同様に、バウティスタが日本に到着した際に遭遇した、精神的、宗教的事実に少々触れてみるのも、興味深いと思う。

日本には2つの宗教が定着していた。

あらゆる物に神聖をみる神道。このため、太陽、月、山、海、滝、川、森、動物、花などを宗教的に敬う。

昔も今も、自然空間は小さな社でいっぱいだ。日本全体が祭壇だらけの大きな神社だった。天皇、著名人、祖先などを神格化していた。

仏教は中国から伝わり、神道と混じり合った。仏教の基本の1つに諦念がある。欲望を諦めることによって、苦しみの原因を取り除く。輪廻は、行いの良し悪しによって、魂がさらに上、あるいは下の生き物に生まれ変わる。人や動物に対する殺生、盗み、嘘、酩酊、不倫を禁ずる。優しく、侮辱に対しても辛抱強くあれ…。

こういった世界観は、冒険家、理想主義者、夢想家、私の同郷人であるペドロ・バウティスタの世界観と、本当にそれほど異なっていたのだろうか？

前にも述べたように、スペインの合宿稽古は、このフランシスコ修道会士の出身地がある同じ山脈内の、ペドロ・ベルナルドという町で行われる。この事実のため、私だけでなく他の人々にとっても魅惑的で、——ペドロ同様——思い出の多いこの場所で、稽古を行うことが、ある種のロマンチックな憧れの気持ちを満たしてくれるようになってから、すでに10年になる。



グレドス山脈。ペドロ・ベルナルドに近いこの場所から、ペドロ・パウティスタの生地、エステバン・デル・バジェの美しい眺めを楽しめる。2002年4月、トマス・サンチェスとエミリオ・ガルシアが、タムラ先生と奥様に見晴らしをご覧に入れる。



ペドロ・ベルナルド町役場。タムラ師範と奥様を町関係者が歓迎。トマス・サンチェスとホセ・マリア・マルティネスが同行。2002年3月。



ペドロ・ベルナルドでの合宿稽古。指導者クラウデ・ペレジン、トマス・サンチェスと他の実践者たち。

今日ペドロ・バウティスタと呼ばれるペドロ・ブラスケスは、24歳の時に、アレナスのフランシスコ会修道院に入った。修道院の厚い壁に、すぐに息が詰まりそうになる。布教への強い欲求だけが、旅を求める心を唯一上回っていたからだ。

当然のことながら、16世紀後半のイベリア半島には、新世界へと誘う雰囲気があふれており、ペドロ・バウティスタは躊躇することなく懇願して、ヌエバ・エスパーニャ——現在のメキシコ——へ向かう修道士のグループに加わる許可を得た。ヌエバ・エスパーニャでは、宣教師の見習いと言えるような状態で、3年間過ごす。ペドロ・バウティスタの夢はさらに大きく、現状に満足してはいなかった。目指すのは中国、日本、フィリピンであり、その目的を実現すると心に決めていたのだ。

当時新大陸とフィリピンの間には、『ガレオン・デ・マニラ（マニラのガレオン船）』号と『ナオ・デ・ラ・チーナ（中国の船）』号で渡る航路——半年ごと——が確立していた。アカプルコ（メキシコ）から出帆して、カロリン諸島、ハワイ諸島を経由して太平洋を渡るものだった。

日本は非常に多くの島から成り、67の小さな領地に分かれていた。それぞれが独立しており、通常互いの関係はあまり良好ではなかった。

イエズス会の宣教師によって、新しい宗教が定着していく際の背景は、このようなものだった。

1582年、日本の勢力地図は非常に大きく揺さぶられ、国家は混迷状態に陥った。その機に乗じたのが——いつでもそういう者がいるものだ——、軍内部で重要な地位に就いていたかつての薪奉行、秀吉であった。素晴らしい統治才能、断固たる態度、ためらいのない大胆さによって、あっという間に権力への階段を駆けのぼったのだ。

当初秀吉は、新しい宗教と宣教師に対し寛大な態度をとっていたが、自ら放縦な生活を送っていたため、情欲を咎める『外国の宗教』を、——少しずつ——憎むようになる。1587年7月、不愉快な示唆の後、宣教師全員の即時追放と、20日以内に教会や学校を取り壊すよう命令を出した。その際には、宣教師が慎重に行動したため、少なくとも血が流れるようなことはなかった。日本のキリスト教会は『カタコンベ（迫害避難所）の初期』を迎えつつあった。イエズス会修道士は日本風の身なりをし、公には礼拝を行わなくなった。

秀吉はこういった秘密裏の活動を知っていたのに、私たちがこのように身をひそめているだけで満足し、命令に背く者たちとして、あえて摘発して処罰しようとはしない』。ある聖職者の記録だ。

ひょっとすると、そのような行為に出たのは、頻繁に行われ利益をもたらしているスペインやポルトガルとの交易に、悪い影響を及ぼすかもしれないという、恐れによるものだったのかもしれない。



ペドロ・バウティスタの旅の再現。

フランシスコ会の最初の派遣隊は、こうした危険な状況のさなかにある日本に上陸した。にもかかわらず、初日から見事な熱意をもって、布教と、貧者や病人に対する慈善行為に専念し、間もなく——修道士たちにとっての——異教徒たちの間に、豊かな精神的結実を見ることとなった。教会や病院などを創設した。あらゆる社会層の人々が、情け深い行いや、修道士たちが粗末とさえ言えるような服に身を包み、哀れなハンセン病患者の世話をしている様子を、見に集まった。

その修道士たちの中に、ペドロ・バウティスタの姿もあった。フェリペ 2 世から秀吉に謁見する大使として任命され、1584 年にはマニラに到着し、貧者とハンセン病患者の中に身を置いて、新しい仕事を熱心に始めた。

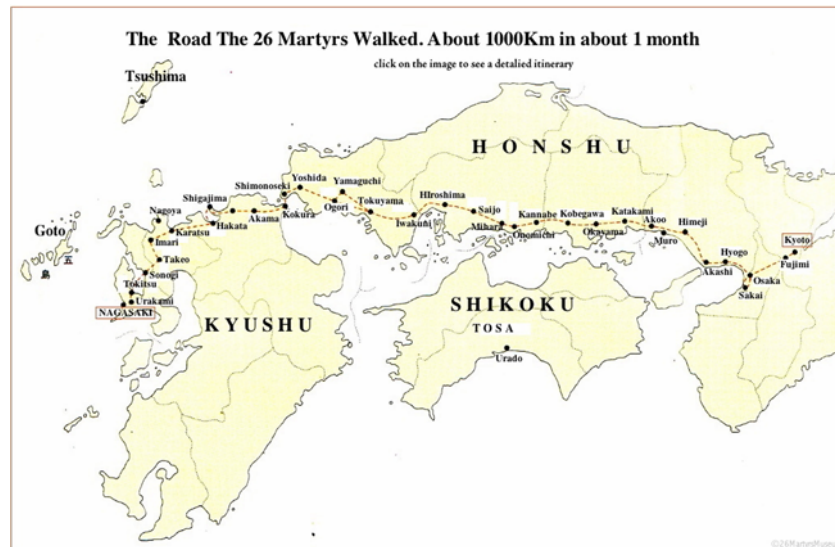
こうした極端なまでに思いやりのある慎ましい暮らし方に、秀吉は苛立つどころか、むしろその反対だった。ペドロ・バウティスタとフランシスコ会の同志を賞賛していたのは、秀吉だけではなかった。他の宣教師とは全く異なる彼らの気性に、君たちの国のあらゆる分野から、関心が寄せられ始めた。ハンセン病患者の体を洗い、傷を手当てし、裸足で継ぎのある法衣を身につけ、——貧しい者のように——施しを受けて戸外で暮らし、贅沢を軽蔑するキリスト教徒を、それまで見たことがなかったのだ。

しかし、彼らに対する賞賛が高まっていく一方で、当局からは日本での布教活動をやめるよう通告が下っていた。イエズス会士の歴史家フロイス神父によると、フランシスコ会修道士の無分別や軽率さ、布教の方法論のために、教会上層部——までも——が、あらゆる宣教、福祉活動、さらには生き延びるための托鉢すら禁じたという。そうすれば、日本での彼らの布教活動を放棄させることができるかと信じていたのだ。

だが、イエズス会とは別の筋からは、違う説明がなされている。例えば、イエズス会のメンバーは、布教の独占権を失うことに腹を立て、他の修道会を激しく攻撃し始めたとか、最後の太閤の怒りが爆発したのは、イエズス会に譲渡されていた長崎の地の豊かな製品から、何の利益も得ることができなかったためであり、布教活動を口実にした侵略であると考えて、キリスト教を禁止するに至ったというものだ。

禁教令から 9 年後の 1596 年 11 月、スペインのガレオン船サン・フェリペ号は、マニラからヌエバ・エスパーニャに向かう途中で、嵐のために浦戸の海岸に漂着した。素晴らしい商品と見事な兵器に通じていた秀吉は、没収命令を出す。この盗みを正当化するための手段として、没収した品物の中にあつた海図を用い、布教の罪だけでなく、スペインの軍事的侵略の準備を行ったものとして、修道士たちを告発した。12 月 8 日、秀吉は宣教師とその信奉者を投獄するよう命令を下した。

太閤は 奉行から、ポルトガル船との交易を断った場合の経済的損害について助言を受け、命令を「フィリピンから来た者たちとその同行者だけ」に限定することにした。処刑者リストには、都のフランシスコ会修道士 5 人、修道士から洗礼を受けた日本人 15 人、大阪のフランシスコ会修道士 1 人と日本人 2 人が残り、イエズス会修道士の家で見つけられた日本人 3 人、パウロ三木、五島のヨハネ、ディエゴ喜斎が加わった。



いずれにせよ、修道士たちに対する日本人の処罰ではなく、手段を選ばず、犠牲者の精神的価値を省みない、ある者たちの常軌を逸した野心が科した処罰であった。

1 月 3 日、殉教者たちは都の下方に連れていかれ、左耳を半分切り落とされた。それから、死刑の告示を先頭に、3 人ずつ荷車に乗せられ、市中引き回しとなった。翌日、長崎へ向けて残酷な歩みが始まった。日本人にキリスト教に対する恐怖の念を起こさせようという秀吉の計画は、失敗に終わった。結果は驚くほど正反対だった。町や市を通る殉教者たちの痛ましい姿は、勇気と忠誠を崇高に示すものとなったのだ。傷つけられた体には、信仰の偉大さとキリスト教徒の真価が輝いていた。それは、勇ましく立派な日本の武士に対して、ペドロ・バウティスタが素晴らしいと感じていたのと同じものだった。

処刑を任されたのは、長崎奉行だった。罪人を迎え、中に親友パウロ三木がいるのを知ると、そのような罪を自分に犯させる残酷な命令を呪った。私の死は涙に値しない、値するのは羨みだ、と殉教者は答えた。真の神の掟と唯一の救済を説いたために私は死ぬ。——このような段階に至って、中国人はもう納得しているだろうか？——

処刑のために指定されたのは、街を見下ろす丘で、十字架が並んでいた。隊長の合図とともに、26人は十字架に掲げられた。十字架が上がっていく間に、キリストの証人たちの声が響き始めた。神への感謝の『テ・デウム』を口にしながら、死の扉に近づいていくのだった。何世紀も後この同じ谷間で、原子爆弾が炸裂した後、さらにひどい残酷さが轟くのだった。



キリスト教殉教者ペドロ・パウティスタとパウロ三木の処刑。

1597年2月5日のことだ。フランシスコ修道会の暦では、殉教者たちの筆頭として、世界的な教会の聖ペドロ・パウティスタと、日本人聖パウロ三木を挙げている。同じ理想のために、共に十字架にかけられた、2つの世界の男たちだった。



理想主義者、ロマンチスト、センチメンタリスト

ケンイチロウ、この機会を利用して、理想主義者でありロマンチストにして感傷的、時には挑戦的で、自らの命を犠牲にして、歴史のページを書き記したあの男たちに、簡単にオマージュを捧げさせてもらいたい。途方もない、信じられない冒険を企てることのできる男たち。津波、台風…、そして一番の恐怖である未知の物に、全力で立ち向かった。

勇気之力、誠実、名誉、精神性を表す話からなる、私たちの国々、あるいは他の国々の物語だ。これらは合気道や生活においても美点である。しばしば、苦しい出来事の中で得られる真価だ。東洋の聖戦で、君たちは何を得たかい？ 700年に及ぶイスラム教徒との戦いで、私たちは何を得ただろう？少なくとも、例え敵であろうが、戦う者の高潔さは見分けられる。

主人公が貪欲や金銭欲を優先させることのない物語が、幸いにも存在する。

結論

終わりに、もう1人偉大なる夢想家について述べておきたい。——スペイン人である上に——世界的に知られる人物で、きっと君も知っているだろう。ドン・ミゲル・デ・セルバンテス・サアベドラ。空想と現実を混ぜ合わせ、ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャを通して、人生が自らを表現するに任せ、1つの時代全体の政治と文化を、彼ほど分析してまとめることができた者は、他にいない。機知に富んだ郷土は、意気消沈、あるいは失望した英雄の、パラダイムなモデルだ。そして、私たちの英雄は？

国を問わず、どの時代も終わりを告げる。だが出会いはいつも続く。

それではまた、ケンイチロウ。

トマス・サンチェス

参考文献:

- *Hidalgos y Samuráis. España y Japón en los siglos XVI y XVII.* GIL, JUAN. Alianza Editorial, 1991.
- *El Samurai.* SHUSAKU ENDO. Pocket, Editorial Edhasa, 1998.
- *Fernando I, 1035-1065.* VIÑAYO GONZÁLEZ, ANTONIO. Editorial La Olmeda, 1999.
- *Alfonso VI Señor del Cid.* MARTÍNEZ DÍEZ, GONZALO. Editorial Temas de Hoy, 2003.
- *Historia marítima del mundo.* DE BROSSARD, MAURICE. Edimat libros, 2005.
- *Los Navegantes.* ROSSET, EDWUARD. Edhasa, 2006.
- *Bajo la furia de Taikosama.* DE LEJARZA, FIDEL. Editorial Cisneros, 1961.
- *Vida y martirio de San Pedro Bautista.* DÉJANO R., FELIPE. Madrid (sn), 1996.